

【研究ノート】

領台初期の台湾語教学（一）

樋 口 靖

Taiwanese learning and educational systems
in the early days of Japanese rule (Part 1)

HIGUCHI, Yasushi

要旨：明治28年台湾は日本の植民地となり、台湾人に対する行政的、軍事的統治が開始された。台湾統治の方針は内地への同化政策であり、その基幹は教育であって、教育政策の実質は言語教育すなわち本島人に日本語を習得させることにほかならなかった。言語教育はもちろん現地人に対する日本語の「押し付け」ではあったが、領台の初期にあってはけっして片務的なものではなく、台湾に渡る日本人に対しては現地語（福建、広東系中国語方言と「蕃語」を含む）の習得が要請された。学習は官吏、学校、軍、民間の各層で広く展開された。少なからぬ日本人が、漢語や欧米語ではなく文化価値の低い「土語」を学ぼうとしたことは史上初めての経験であったろう。「土語」はあくまで実用のために学ばれたので、「土語」の学習熱は日本語教育が一定の成果をあげると次第に下火になっていった。小論の目的は台湾「土語」のうち、最も使用人口が多く優勢な言葉であり、従って内地人の学習人口も相対的に多かった福建系台湾語の学習教育が、現場ではどのようなものであったのかを一次資料によりながら具体的に振り返ってみることにある。当然、資料から当時の台湾における言語の実際状況を知ることができる。また、日本植民地時代にあげた日本人の台湾語研究における成果も純学術面から見て極めて大きなものであり、この点も併せて考察する。考察は軍、官、民の各階層について行われる。

キーワード：台湾語、台湾十五音、官話、台湾語通訳、国語教育

1. はじめに

日本人による台湾語の本格的な研究教育は明治28年7月、日本による台湾領有の直後に開始された。領台初期、台湾総督府の言語政策の根本思想は、台湾人をして日本語を学ばしめ、日本人もまた台湾語を学び、而して日台人双方の意思疎通に不便なからしむることにあった。¹⁾

夙に明治29年2月、台湾総督府民政局学務部（後の民政部学務課）は『新日本語言集』を出版している。この書は「台湾土人ニ我現行ノ国語ヲ教ヘ又本国人ガ台湾土語ヲ学ブノ用ニ供センガ為メ撰修」（同書『緒言』）された僅々86頁の簡便な対訳式語学教科書に過ぎないが、ここには後に民政局より公布されることになる台湾語発音仮名表記および八声符号の原型が採用されており、以後の台湾語教育の基礎が固まっていたことが判る。

そもそも書名の『新日本語言集』は、「新日本」の言語なのか、或いは、日本の「新しい言語」なのか判然としない。けれどもこの書名から、明治の新生日本に加わったあらたな言語——「台湾語」の教育研究に取り組みんとする先達の意気込みが伝わってくる。

『緒言』を見ると学務部員として楫取道明、井原順之助、関口長太郎、中島長吉、桂金太郎、平井数馬らがこの書の編集に参加していることが知られる。実はこの年の正月、「六士先生」は芝山巖において凶刃に斃れていた。

本書の実質的な企画立案は初代学務部長伊沢修二であったに違いない。伊沢は領台初期の言語政策を策定したその人である。伊沢は明治28年6月に台湾に赴任し、明治31年6月に学務部長を解任されているので、その在台時代は僅か3年足らずであったが、その任期中、以後の台湾語教学の発展に多大な足跡を残すこととなった。²⁾

明治29年11月総督府発行『台湾十五音及字母詳解』は台湾語の発音の基準を示す重要な一里塚となった。また明治31年12月総督府発行『日台小字典』は小川尚義らの編纂によるが、後の偉業『日台大辞典』、『台日大辞典』の礎となったものである。これらの重要な著作はみな学務部時代

領台初期の台湾語教学（一）

の伊沢修二の発案と唱導に係るものである。

伊沢の台湾語に対する最大の功績は小川尚義を見込んで台湾に呼び寄せたことであろう。小川は伊沢の招聘に応じて明治29年12月に台湾に渡り総督府囑託に任ぜられ³⁾、以後台北帝大教授を兼務するなど、敗戦によって台湾を離れるまで、50年になんなんとする年月を台湾諸言語の研究に奉げた。領台時代の台湾語界をリードした杉房之助、中堂謙吉、平沢平七、岩崎敬太郎などは小川尚義の教導の下、総督府学務課において育った俊秀達である。

さて、明治28年（1895）4月17日、下関講和条約が締結され台湾と澎湖は日本に割譲されることになり、2ヵ月後の同年6月17日、台北城で始政式が執り行なわれて台湾総督府が開庁され、台湾人の抵抗未だやまず、人心不安の中、50年にわたる日本の台湾統治が開始された。この時から日本人は正式に台湾語と接触することになり、台湾の諸言語は日本の言語の一部を構成することとなった。台湾人に日本語を教育すると同時に、日本人が台湾語を学ぶことも民政上、軍事上からも喫緊の課題とされ、公的な台湾語教育がただちに開始された。

言語教育における実際上の要請を受けて、台湾総督府民政局学務部は領台開始の年の年末、明治28年（1895年）12月に『台湾十五音及字母附八声符号』を出版した。学務部はまたそのおよそ一年後、明治29年11月に『訂正台湾十五音及字母表附八声符号』と『台湾十五音及字母詳解』をほとんど同時に発行した。さらに、そのおよそ4年半後の明治34年（1901年）3月に『訂正台湾十五音字母詳解』を発行した。⁴⁾

書名からも察しられるように、この4冊は台湾語に関する一つのシリーズを成すもので、『訂正台湾十五音及字母表附八声符号』は『台湾十五音及字母附八声符号』の改訂版、『台湾十五音及字母詳解』は2種『字母表』の詳解版、明治34年の『訂正台湾十五音字母詳解』はこの『詳解』の改訂版である。

『台湾十五音』は日本語の50音図と同じく音節総表の一種である。た

だし、台湾語の音節の種類は日本語の5段10行50音と比べればずっと複雑で、その上に、声調の区別が加わるわけである。『台湾十五音』は声母と韻母の組み合わせで個々の音節の異なりを指定し、その音節の発音をもつ代表的な一字の漢字を与える方式であるから、中国風にこれを一種の韻図と見ることができる。そのユニークなところは、それぞれの代表字に対して日本語のカナでもって読み方を示していることである。もちろん、カナは音節文字であるから、ローマ字のように音素を直接かつ精密に表すことは難しいが、たまたま日本語カナのもつ音価は台湾語の音価によく似ているので、結果として、カナを用いて台湾語の音を表そうとする試みはよく成功している。

台湾語は中国語と同じように、1つの形態素または語がおおむね1音節からなり、表記上からは1つの漢字が対応するので、逆に言えば、漢字の読音の異なりを知れば、それがすなわち台湾語の発音体系を理解し、台湾語の「語」をも理解したことになるのである。総督府学務部は台湾語のこのような言語的性格を正しく把握し、『台湾十五音』を真っ先に提示するをもって台湾語教育の皮切りとしたのである。

いま、領台初期における学務部『台湾十五音』発行の意図が奈辺にあるかを察するに、(1)日本語カナをもって台湾語の発音を表記すること、(2)台湾語の音韻体系を確定的に示すこと、の2点に集約できる。カナ表記について言えば、その綴り方の基準示す必要があった。というのも、領台開始以来、多くの軍人、官僚、民間人の渡台が始まり、内地人は初めて台湾の言語に接触することになり、従って、かれらが現地語を理解する能力を獲得することは実用上の焦眉の課題であったわけである。しかし、『台湾十五音』が発行されるまでのおよそ1年間、民間ではおよそまちまちなカナ表記が氾濫しており、しかもそれらは不正確極まりないものであった。というのも、特に語学的訓練を受けたとも思われない語学的「素人」が自分の耳で聞いた現地人の発音を自己流のカナ表記を用いて表現し、それを言語学習素材として出版提供するという状況だったわけで、それは無理から

領台初期の台湾語教学（一）

ぬところであった。自己流のカナでもって外国語の発音を表記すれば、その表記法がその言語の音韻体系を十分に反映できない可能性があるということは、いまも巷に氾濫する外国語教材や辞典の表記を見ればすぐに分かることである。言い換えれば、規範的な表記システムを提起することは、取りも直さず当該言語の音韻システムをきちんと提示することにはほかならない。すなわち、台湾総督府は台湾統治のもっとも早い時期に『台湾十五音』を公開することによって台湾語の発音システムに対する高度な理解認識とオフィシャルな実用表音法を台湾語の学習者と教育者に提供したことになるのである。

ただし、『台湾十五音及字母附八声符号』の出版によって台湾語カナ表音システムが確定された訳では決してなく、数年をかけていろいろな試みと調整が行われていた。明治34年の『訂正台湾十五音字母詳解』に至ってもまだ最終安定版というわけにはいかず、さらに試行錯誤が繰り返され、カナ表音システムが本当に安定したのは明治40年（1907）台湾総督府『日台大辞典』出版のあたりで、その間、官・民から出た多くの台湾語テキストや辞書類はなおかなりの表記上の揺れが見られる。

ところで、周知のように当時台湾には福建南部に由来するいろいろな訛りの台湾語が行われていた。実際の語学学習・教育においては現存するあらゆる訛りを完全に習得することは不可能でもあるし、その必要もない。数年をかけたこの表記システムの研究の過程で、表記される訛りはどの種類のものであるべきかという問題も次第に明らかになってきた。これは意識的に提起され研究された問題のようには見えないが、次の2点においてやはり重要であると考え。すなわち、1) 教学のターゲットが台湾南部と北部に行われる通用範囲の比較的広い方言に絞られてきたこと。よって表音システムもこの2種類の方言が目標となっていたこと。2) 公的な表音方式が安定するにつれて、この2大方言を中心に「台湾語」という観念が形成され始めたこと。言い換えれば、カナ表記は台湾語が福建語から分岐を始める1つのきっかけになったということである。

樋口(1984)は、台湾総督府による一連の刊行物⁵⁾が、台湾語研究のための出発点となるはずの重要な研究資料であることを指摘した。解嚴以後の台湾語研究に対する気運の高まりにつれて台湾でもこれらの資料が再び見直され、研究上相当な進展があった。⁶⁾筆者の見方は基本的に変わっていないが、近年來のこれらの研究成果を踏まえて、再整理を試みるのも無駄ではなかろうと考えた。よって小論は、台湾語発音カナ表記の形成過程を振り返り、『台湾十五音』に代表される台湾語発音システムに対する公の側の(すなわち台湾総督府の)認識を検証し、あわせて、それによって表現された110年ほど前の台湾語の訛りがどのような姿であったのかについても素描し、台湾統治の初期、日本人がそれまでほとんど知ることのなかった未知の「土語」-----台湾語をどのように受け入れ教え学ぼうとしていたのかについて点描を試みたい。

2. 台湾語という呼称と概念

台湾語は学術上は中国語の方言である福建方言のさらに下位方言の福建南部方言の1変種として扱われるのが普通であり、現在の台湾では閩南語もしくは閩南方言とか、あるいは福建以外にも広東省、海南省、東南アジア各国などに広がった福建南部方言と区別して台湾閩南語のように呼ばれることも多い。それはアメリカに行われる英語が時にアメリカ英語と呼ばれる現象と似ていて、よく理解できることである。しかし台湾福建語が福建南部語とまったく同じではないという事実はかなり早い時代から知られていて、たとえば、ダグラスが1899年に出版した『廈英大辞典』所収の語彙の中にも「特にFormosaで使われるフレーズ」のような註記が散見され、興味深い。「台湾語」という呼び方が中国側あるいは台湾においていつ頃かどのような意味で使われだしたのかは詳らかにしないが、日本人は領台開始のごく初期から台湾福建語のことをこの言い方でもって呼び始めた。台湾人も長い間自分たちのことばを「台湾語」、「台語」のように呼びならわしてきた。日本時代に現れた台湾語教材や辞典類は日本人の編集に係る

領台初期の台湾語教学（一）

ものであるか台湾人の編集に係るものであるかにかかわらずそのタイトルはほとんどが「台湾語」あるいは「台語」の名称を冠されている。

かつて王育徳先生は、「台湾語を閩南語と称するのは、現実にそぐわないし、長い慣用からもはずれている。それに学問的にも正確とはいえない。台湾人は自分たちの言葉をtai5-uan7-ue7とよび習わしてきたし、現実にはほとんどの人がそうよんでいる」と指摘された。筆者も台湾語という呼称が「学問的」用語に成り上がることを期待したいが、さてどんなものであろうか。そこまで行かなくても社会通念としては認知された「現実」であることは間違いない。ただし、「台湾語という観念には広義と狭義の場合があって、「広義の場合は全体の台湾人の言葉-----400年来この島と運命をともにしてきた人々、多数派の福建系、少数派の客家系、さらにより少数派のタカサゴ族の言葉も含めるのが理くつである。狭義の場合は多数派の福建系の言葉をさす。しかし実際には少数派の客家系は生活必要上多かれ少なかれ福建系の言葉を話す。タカサゴ族にしても漢族系との関係が深まれば、自然に福建系か客家系の言葉をはなすようになる。それで普通に台湾語といえば福建系の言葉を意味する場合が多い」とされた。⁷⁾地域名称を以てその地域が含む複数言語の一部だけを代表することの不公平はたしかに「理くつ」ではあるが、ここはひとまず客家、原住民を含む台湾人が「台語」という言葉でイメージする、その「狭義」の台湾語を考察の対象とする。

福建閩南語と台湾閩南語の差異についてはもちろん言語学的にさらに厳密に検証されるべきことではあるが、この事実は近年兩岸の往来が頻繁になり、言語上が接触が深まるにつれてますます明らかになって来ている。語彙面においても、発音・アクセント面についても言語資料に基づいた客観的な研究が進められているのは心強いかぎりである。

3. 領台初期における日本人の台湾語観

台湾が日本の植民地となって、日本人の渡台が始まった。軍、官はもち

ろんのこと、たくさんの民間人も生活の基盤をかの地に移し、あるいは商機を求めて渡台していった。ここにたくさんの日本人が台湾の言語に直接触れることとなった。これはこれまで日本語社会で暮らしてきた普通の日本人が異種言語と大規模に接触した未曾有のできごとであった。このことは以後50年の植民地時代を通じて台湾語の教学と研究を展開していく一個の重大な契機として見過ごすことのできない問題であると考えられる。では当時の日本人は台湾人とどのようにしてコミュニケーションを図ったのか、台湾の言語に対してどのような見方をしていたのか。

じつは領台に先立こと20年も前、明治7年の「征台の役」に際して出兵した日本軍は当然当時の原住民(パイワン族)と直に交渉する必要が生じたのであった。この時、「まず日本語を英語に訳し、それから英語を支那語に訳し、それによって蕃語に訳した」という⁸⁾。この事実から分かることは、日本軍は「蕃語」の通訳を準備できなかったということ、英語と中国語の通訳を調達したこと、一般の台湾人中に「蕃語」を解する者がいたか或いは「蕃人」の中に中国語を理解する者がいたということである。この時の中国語が官話であったのかそれとも閩南語であったのかは定かではない。どちらにしてもこの時には日本人の中国語通訳では準備できず、英語通訳しか準備できなかったということである。

これは早い時代の日本人の台湾における言語経験であったと思われるが、その事情は20年経った領台開始期に至っても大して変わらなかった。

明治28年から30年代の初めにかけて、ぞくぞくと渡台する人たち——軍人、官吏、教師、警察官、獄吏、商人、その他一旗揚げ組の民間人など——を当て込んでなん点もの台湾地理、歴史、社会事情に関する書物が出版されている。だいたいキワモノであったが、台湾の言語事情についての見聞を著したものも含まれ、一部興味深い記述も散見される。

たとえば、天野馨 1895 (明治28年) に、実際に台湾に赴いた測量師から聞いた話として、「台湾語学は生蕃族と熟蕃族の居住する商業地とは全く用語を異にして商業地には多く支那人の居住する事なれば支那語を研

領台初期の台湾語教学（一）

究したる者たらんには多くは差支えなし然らざれば内地人にして若し渡台せし場合には即ち筆談に若くはなし」とある。⁹⁾すなわち、「熟蕃」と「支那人」の居住する商業地は、支那語のできるものは「差支え」ないし、そうでない内地人でも筆談でよいと言っている。ここに云うところのシナ語とはおそらく官話をさすとみてよかろう。一部の紳士、商人と官話や筆談で用が足りたのは想像に難くはない。天野は該書に「台湾日用語学」なる一章を設けて、28語の「蕃語」と78語の「通語」を挙例している。この「通語」は例外なく官話語彙であって、台湾語らしきものはまるで見当たらない。例えば、

我（われ）	ウオー	雨（あめ）	イー
休息（やすみ）	シエーシエー	只今（ただいま）	シエンツアイ
近（ちかき）	チン	不潔（ふけつ）	プカンチン
多数（たすう）	トー	小（ちいさき）	シャヲ
飲水（のむ）	ホー	頭痛（あたまがいたむ）	ドードン
船に酔（ふねによぶ）	インジョワン	日の出（ひので）	ターヤーンマヲゾヲライ

等々。これらを見ると天野は中国語についての素養はなく、官話と福建語との違いについてももちろん観念が欠如しており、現地人の教える官話を自身の耳の聞くままにカナでメモしたと察せられる。「暑熱（あつさ）アツイ」などの記述があるのは御愛嬌である。

また、同じころに出版されたかなり本格的な台湾語学習書『台湾土語全書』の編者のひとりとは、¹⁰⁾「台湾の土語何んぞ之を研究するを須ひん。須らく土人をして日語を研究せしむべし。吾人戦勝国の人民にして其新領地の土語を学ぶが如きは不見識の至りなり」等の「世人の説」が多いことを嘆いている。

当時台湾の一部に官話が通じたこと、筆談が有用であること、時には英語の使い手もいたことは一面の事実ではあったが、人口の圧倒的多数の母語は「土語」であり、それ以外の言語を操ることができたのは少数であったことは言うまでもない。小川尚義によれば、¹¹⁾明治39年の段階で台湾

の人口はおよそ300万といわれ、そのうち日本人が5万、生蕃10万、熟蕃1万、漳州語話者110万と泉州語話者120万で福建系が計230万人、客人語50万人、その他の「支那語」を話す者が4万人であったというから、¹¹⁾ 官話の話し手はこの支那語4万人以下に過ぎない。よって、このような官話重視が、植民地の統治――軍事上でも民政上でも――に於ける民衆とのコミュニケーションに重大なギャップをもたらすこととなった。

ところが、このような誤った判断をしたのは上述のような一般渡台者だけではなく、かの伊沢修二にしてからが例外ではなかったのである。伊沢は陸軍雇員でもあったので100名以上の通訳を軍のために「リクルート」して台湾に帯同させたのであるが、実際にはかれらはほとんど役に立たなかった。伊沢曰く、「言語不通の為、文武官吏の不便を感ずること意外に強く、百数十名の陸軍通訳ありと雖も、台北地方の土民を尋問するに、訳を重ねて而して尚不通の語を聞くこと間々有之」¹²⁾ と。なぜなら通訳の言語技能はほとんどが官話、一部が英語に限られたいたからであった。¹³⁾ また、総督府吏員中の通訳官は9名でだれも現地語を解するものはおらず、北京語もしくは英語を介する二重通訳であった。¹⁴⁾ このことが学務部長伊沢修二が本島人に日本語を習得せしめることと併せて、内地人に台湾語を習得せしめるを喫緊の課題考えるに至ったひとつの理由であった。

当時の日本人の台湾言語に対する認識がまったく見当はずれのものであったのかといえそうでもない。例えば、明治28年6月に出版された瀧川三代太郎著『新領地台湾島』を見ると、「台南台北の言語は共に首として厦門漳州泉州等の如き福建省南部の土音に広東省汕頭等の土音を混和したるものに係る故に、厦門の土語に通ずれば開港場附近の地方に在ては毫も不自由を感ずることなし」とあり、また、同年秋、長谷川鏡次という材木商が台湾を実地に踏査して、『台湾視察報告書』なるものを出版していて、「蕃語を除くの外、台湾人民間に通用する言語は台湾語とも称すべき混成土語の外、厦門語福州語広東語にして、極めて少数者間に官話の通用する

領台初期の台湾語教学（一）

を見る。英語は基隆、淡水、安平、打狗等の開港場にて僅かに之れを解するものもあるも通用と云ふに至らず。右の言語中台湾に最も便なるは廈門語なるべし。官話は高等社界（ママ）中には用ひらるも一般には通用せず。然れども目今我軍隊或は民政庁に奉職する通訳官は多く官話を学習したる人にして（間々福州廈門語に通ずる人もあり）、更に官話と土語とに兼通する土人を復通訳者として用ひ以て其用を便せり。勿論台湾のみに志あるものは混成土語に如かざれど、国本も清土との交通をなさんとせば官話は勿論廈門語、福州語を学はさるべからず」と述べている。

すなわち台湾語が福建広東のいくつかの土音の「混成土語」であって、「清土」の廈門語そのものとは異質であること、ただし、廈門語は台湾にあってもよく通ずるがゆえに、台湾に「志あるもの」にとって大変便利であることがきちんと把握されており、かれの台湾の言語事情に対する観察がまことに正確であったことに驚かされるのである。

明治28年7月参謀本部出版の『台湾誌』の記述にも、「蕃人を除くの外、台南台北共に言語は重に廈門漳州即ち福建省南部の土音にして、之に広東省汕頭等の土音を混和したるものなり。故に廈門の土語に通ずれば開港場附近の地方に在ては不自由の事なし。廈門の英国宣教師ドクトル・マガオニ氏(J. Macgowan)を指すか?の説に拠れば廈門土語は福建省の南部各地と台湾南北に通じ、今日廈門語を使用するものは人口七百万の多きに至ると云ふ。是を以て我日本人の台湾に貿易を営まんとするものは、初め廈門土語に通ずること必要なり」とあって、記述はほとんど同じであるが、瀧川、長谷川はおそらく民間人であるのに対して。これは参謀本部という国家機関の台湾語認識を反映しており、注目に値する。

4. 領台初期渡台軍通訳官および軍人の台湾語

下関講和会議の最中、明治28年3月23日比志島義輝大佐率いる比志島混成支隊が澎湖島に上陸した。いわゆる乙未戦争の前哨戦である。混成支隊司令部通訳官侯野保和はその5月に台湾語の単語と会話を収集して台

台湾語教材『台湾日用土語集』を編纂し、7月に出版した。これが「日本人による最初の台湾語著書」となった。¹⁵⁾ その序言に「(本書は) 身は異邦の病床にあり枕辺に土人の児童を招き、其の急遽の内に慣れるを以て実に杜撰不整の者たるを免れず」云々とあるところを見れば、俣野はおそらくは官話通訳官であって台湾語には通じていなかったと思われる。「土人の児童」に学んでいることから、その言語はおそらく当時の澎湖方言である。よって本書は不完全とはいえ澎湖方言を反映する比較的早期の記録と見ることができる。¹⁶⁾ 単語および会話の文例は漢字をもって表記され、その発音はもちろんカナをもって近似表音されたが、四声は表記されていない。カナで表すことの難しい末尾閉鎖音、鼻音化母音、有気無気音についてもアドホックな表音がされており、音韻体系について編者の理解が未だ不完全であったことを示している。また多くの官話語彙と表現が採用されている。例えば、「亮(明らか)、回来、回去、可以、別動(動くな)、去罷(去れ)、別帳羅(御構ひ被下るな)」等々。面白いのは泉州訛りと漳州訛りの混在する澎湖方言の言い方を併記する箇所が頻繁に出ることで、例えば、「魚ヒー、フー」、「火フー、ホー」、「皮プー、ピー」、「昏ヒーーン、フーン」、「灰ヒーウ、フーウ」、「月ゲッ、ゴッ」等々。

明治28年9月出版『台湾地誌及言語集』の編者岩永六一の肩書きは「混成支隊司令部通訳官」である。これは比志島支隊のことであろう。本書の前半は台湾地理の解説で、後半は台湾語の単語、短句、会話から構成された台湾語教材である。本書には序文の類がなにも付されていないので詳らかではないものの、末尾「付録」にかなり詳しい澎湖郷名列島名と台湾語の読方が掲載されていることや上記俣野著と採用語、発音がよく似ていることから推して、岩永が俣野と同僚であったことは間違いない。以下、参考までに、俣野と岩永の表記を身体の部について較べてみる。

俣野保和	岩永六一
頭 ターウ	頭 タウ
頭毛 ターウムン	頭毛 タウモン

領台初期の台湾語教学（一）

面 ミン	面 ミン
目周 マッチュー	目瞞 マツチュ
耳 ヒー	耳 ヒイ
頬 スワン	頬 ポイ
嘴 ツウイ	嘴 チユイ
鼻 ピー	鼻 ピー
嘴唇 ツウイドーン	嘴唇 チユイチュン
嘴舌 ツウイチツ	嘴舌 チユイチイ
嘴鬚 ツウイチユー	嘴鬚 チユイチユー
目眉 マツマーイ	目眉 マツマイ
項管 アムクーン	項管 アンクン
喉籠 ナーアウ	喉籠 ナーウ
心肝頭 シムクアーターウ	心肝頭 シンクワンターウ
腹肚 バツドー	腹 パトウ
腰 イオー	腰 ヨウ
背 カーチャ	背 カーチャ
二節 (欠)	手腕 チウワン
脚 カー	脚 カー
指甲 チーカッ	指甲 チーカー
血 フイ	血 フイ
心 シム	心 シン
放尿 バンサーイ	放尿 パンサイ
放尿 バンニユーウ	放尿 パンジュウ

両者の採語と漢字表記はほとんど一致しているが、発音表記については区々であったことが瞭然である。

北白川宮能久親王率いる近衛師団が三貂湾から上陸を開始したのが5月、台北城における始政式が6月、8月下旬といえは近衛師団は未だ台中、彰化あたりにまでしか歩を進めていなかった頃、近衛師団司令部附坂井鈞五

郎が新竹陣中にて『台湾会話編』を編み、9月に出版した。これも単語、会話に台湾地名を付した台湾語教材である。その「緒言」に「敵情を探り吾人が任務を果し又自己に便を与ふるは其土語に通曉せざる可らざるの必要を感ず。則ち余暇を以て実地に土語を研究編纂して一冊子となし之を剗削に付す」とあるところをみると、軍人であって通訳官でなかったかも知れない。ただ採語、採句の内容を見るに、縦令通訳官でなくとも坂井は官話の素養を備えていたか、あるいは現地で研鑽を積むに当たって官話の影響を大きく受けているかしたことは明らかである。それは、たとえば、「窓戸（まど）ツンホー、好容易（漸く）ホーヨンイー、生意（商売）シュンイ」など官話系の語彙が多く混じること、また、

那麼你們天天吃甚麼水（ナーボ レン ジジ チャ シャーミー ツイ）

我們喝的都是開水（グン デム ゲイ ロン シ コンツイ）

など、官話表記に台湾語発音を当てていることによく現れている。発音は、たとえば、「水銀ツイグン、医院イーイン、我們グン、放尿パンリョウ、烏魚ウーフー、買ボー」など北部の泉州腔によっている。促音入声、鼻音、有気無気などを正しく表記し分けることは難しく、四声もまた無表記である。

おそらく坂井は俣野、岩永兩名とは無連絡であったであろう。付録「台湾地名」においても、淡水から台北、基隆から蘇澳、台北から打狗となっていて、澎湖については全く挙げられていない。

時代は少し下って、明治30年12月、傘田少尉編『土語』を紹介しておきたい。¹⁷⁾ これは問いと答えからなる軍中の実用を目的とした台湾語会話集である。緒言に「中隊長の命に抛り下士上等兵に土語を修めしむるに当り教科書なきを以て、予の不才と浅学とを顧みず此冊子を編す。-----学生は豫め此冊子に就て自習暗唱し受業の際は教官の発音と己の記憶することと相違する点を聴き分け、教官の発音に習ふことを勉べし。若し夫れ自習を怠り講堂にて仮名を読む人は例ひ土語にて談話するも土人は之を了解すること能わざるべし」とあり、当時軍隊において「下士上等兵」が

領台初期の台湾語教学（一）

「講堂」において教官から台湾語を習っていたことが分かる。また、「予は渡台後、日尚ほ浅く土語に通ぜざるを以て此冊子を編するに際しては国語伝習所生徒柯太茂なる少年に就て之を質し、彼我の意通ぜざる者は聯隊の副通訳鄭天禄に問ひ、尚ほ教授の際鄭に命じて訂正せしめたりと雖も、予は未熟の漢語と未熟の土語を混じて問答すること多く、彼れも亦た往々誤て漢語と土語を混じて応答するが故に、或は彼我の意充分に通ぜずして誤りあるやも亦た知る可からず」とあるのに依って、当時現地人について直接台湾語を習ったこと、漢語（たぶん官話）と台湾語のチャンポンで問答したために、教える側の現地人も「往々誤て漢語と土語を混じて応答」することがあり、それによって編集した結果教材に「誤り」の混入した恐れがあることを率直に述べている。

さらに牟田は「警語」を加えて土語に通じないのは聾啞と同じであり、「聾啞は軍人の任務を完ふすること能はざるのみならず、或は部下の生命を損ぜしめ軍隊に大なる損害を被らしむることあるべし。幹部たるもの豈に土語を軽視して可ならんや」と締めくくっている。当時の「兵馬恠惚」の際、軍にあって台湾語能力の獲得が急がれたさまをよく映している。

『土語』の訛りは「銀ギン、生理（商売）センリー、二個人夫ジーゲジンフ」などの発音表記と会話に出る地名から推して南部の漳州腔であると思う。（未完）

注

- 1) 後の民政部学務課。
- 2) 昭和24年台湾教育会編『台湾教育沿革誌』と昭和18年佐藤源治著『台湾教育の進展』には台湾教育の詳細な年譜が付されており、両書を併せみれば極めて有用である。
- 3) 同僚に伊能嘉矩がいた。
- 4) 明治31年6月、民政局が民政部と改称されたのにもない学務部も縮小されて学務課となっていた。
- 5) 以下、「台湾十五音」と総称する。

- 6) 村上嘉英1989, 陳恒嘉1993, 陳君慧2002など。
- 7) 王育徳1987, p. 1419など参照。
- 8) 種村保三郎1945参照。
- 9) 以下, 原文が片仮名表記の場合は平仮名表記とし、句読点を加えた。
- 10) 明治29年, 田部七郎による序文。
- 11) 「台湾語について」(台湾協定会報第90号、1906)。
- 12) 『台湾教育沿革誌』 p. 6。
- 13) Klöter, 2005, p. 132。
- 14) 村上嘉英, 1989参照。
- 15) 張良沢, 1984参照。
- 16) 呉守礼1997, p. 83。
- 17) わずか12葉の手書き原稿である。三田祐次氏が2005年に古書肆で入手され、カラーコピー一部を恵投賜った。記して深く御礼申し上げる。牟田中尉の所属部隊と名前は不明。時期と内容から見て三田氏のお説の如く、台南駐屯の近衛師団所屬か。この小冊子は軍における台湾語教育学習の実態を記述した貴重な資料である。

参考文献

- | | | | |
|------|----------|------------------|-------|
| 1895 | 天野馨 | 地理風俗台湾事情 | 大川屋 |
| 1895 | 参謀本部編纂課 | 台湾誌 | 参謀本部 |
| 1895 | 瀧川三代太郎 | 新領地台湾島 | 今古堂 |
| 1895 | 総督府学務部 | 日本語教授書 | |
| 1895 | 侯野保和 | 台湾語集 | 民有社 |
| 1895 | 岩永六一 | 台湾地誌及言語集 | 中村鍾美堂 |
| 1895 | 加藤由太郎 | 大日本新領地台湾語学案内 | 東洋堂 |
| 1895 | 佐野直記 | 台湾土語 | 中西虎彦 |
| 1895 | 田内八百九萬 | 台湾語 | 太田組 |
| 1895 | 坂井夙五郎 | 台湾会話編 | 嵩山房 |
| 1895 | 総督府学務部 | 台湾十五音及字母附八声符号 | |
| 1896 | 長谷川鏡次 | 台湾視察報告書 | |
| 1896 | 総督府学務部 | 新日本語言集(甲号) | |
| 1896 | 水上梅彦 | 日台会話大全 | 民有社 |
| 1896 | 辻清蔵・三矢重松 | 新領地台湾会話編 | 明法堂 |
| 1896 | 御幡雅文 | 警務必携台湾散語集 | |
| 1896 | 田部七郎・蔡章機 | 台湾土語全書 | 小泉力松 |
| 1896 | 秋山啓之 | 実用日台新語集 | 近藤常七 |
| 1896 | 総督府学務部 | 台湾適用小学読方作文掛図教授指針 | |
| 1896 | 総督府学務部 | 台湾適用会話入門 | |

		領台初期の台湾語教学（一）	
1896	総督府学務部	台湾適用国語読本初歩（上）	
1896	総督府学務部	国語教授参考書	
1896	木原千楯	独習自在台湾語全集	松村久兵衛
1896	総督府学務部	訂正台湾十五音及字母表附八声符号	
1896	総督府学務部	台湾十五音及字母詳解	
1897	牟田中尉	土語	手書原稿
1897	台湾語講習所	新撰台湾会話問答第1編	台湾土語叢誌所収
1897	保野和吉・ 高橋静虎	軍人用台湾語	軍人教育館
1898	総督府学務課	日台小字典	
1899	杉房之助	日台会話新編	博文堂
1900	兼松磯熊	台湾発音学	稲江義塾
1904	竹腰与三郎	台湾統治誌	
1906	小川尚義	台湾語に就いて	台湾協会会報 第90号
1926	藤崎齐之助	台湾史と樺山大将	
1927	吉野秀公	台湾教育史	南天書局影印
1928	伊能嘉規	台湾文化誌	
1933	台湾教育会	芝山巖誌	
1935	井出季和太	興味の台湾史話	
1936	林進発	台湾発達史	
1939	文部省内教育史編 纂会	新領土其他に於ける教育第三章台湾 の教育	教育制度発達史 第11巻
1939	台湾教育会	台湾教育沿革誌	
1943	佐藤源治	台湾教育の進展	台湾出版文化株式 会社
1945	種村保三郎	台湾小史明け行く蓬萊	東都書籍
1956	台湾省文献委員会	台湾省通志稿卷5教育志	
1960	王育徳	台湾語の系統	台湾語講座第1回
1963	呉守礼	台湾方言研究目録	台北文献第6期
1984	樋口靖	十五音と台湾十五音	筑波中国文化論集 5
1984	張良沢	台湾語とは？	筑波大学外国語教 育論集
1985	王育徳	台湾語の記述的研究はどこまで進ん だか	明治大学教養論集 第184号
1987	王育徳	台湾語音の歴史的的研究	第一書房
1989	蔡茂豊	台湾における日本語教育の史的的研究	東呉大学日本文化 研究所

- | | | | |
|------|------------------|------------------------------|----------------|
| 1989 | 村上嘉英 | 日本人在19世紀末期對臺灣閩南方
言音韻的研究工作 | 天理大学学報
160号 |
| 1993 | 陳恒嘉 | 日本の領台期に於ける台湾語教育と
研究の一考察 | 東吳大学碩士論文 |
| 1996 | 村上嘉英 | 日本人の台湾における閩南語研究 | 日本文化第45号 |
| 1997 | 吳守礼 | 福客方言綜誌 | 従宜編輯室 |
| 2002 | 陳君慧 | 訂正台湾十五音字母詳解音系研究 | 中山大学碩士論文 |
| 2005 | Klötter, Henning | Written Taiwanese | Harrassowitz |